

「待つ」と「せかされる」の間で^{はざま}

<高知> 森 知 美 香

◇熟成の一文

二月一日、二年二組最後のつづり方の時間、親指と人指し指と中指をそろえて、ちびて芯の丸くなった2Bの鉛筆で、かずもとが綴った。

ねました

二年二組 かずもと

かずもとねました。

二年間かかってやっと綴った誰にもわかる一文であった。

だが、原稿用紙を手渡されたとき、私は、本当にこの子が綴った文だろうか、疑いを拭えなかった。これまでの二年間、かずもとは自分で文など綴ったことなどなかったのだから。

一年生の二学期の、

はんぶんこ

あさ、ぼくがパンをたべていたら、おかあさんが、
「ちょっとわけて。」
といいました。

ぼくは、おかあさんに水を入れてきて、水とパンをぜんぶあげました。おかあさんは、
「ありがとう。」

と、いいました。おかあさんは、パンをちびちびちびちびとたべました。

ぼくは、ジュースもあげました。

おかあさんが、パンをはんぶんくれました。ぼくとおかあさんは、パンをはんぶんこしてたべました。

にしても、三学期の、

おふろ

よる、おかあさんとおふろにはいりました。

おかあさんとぼくは、おゆにつばかりました。おかあさんが、

「きもちいいね。」
と、いいました。
ぼくは、
「一〇、二〇、三〇、四〇、六〇、七〇。」
と、かぞえました。おかあさんが、
「もういっかい、かぞえて。」
と、いいました。ぼくは、
「一〇、二〇、三〇、四〇、五〇、六〇、七〇。」
と、かぞえました。おかあさんは、
「五〇が、いえたねえ。」
と、いいました。
ぼくは、お風呂からでて、二かいへいきました。
また、ふとんの中で、かぞえました。おかあさんが、
「いえて、よかったねえ。」
と、いいました。

にしても、私とかずもとのおしゃべりの中から、私が題材を見つけ出し、私が聞き出し、私が文にしたものであった。たまたま自分で綴ったように見えた、

いじめ

九月うんどうかいのれんしゅうがはじまったころ……。

にしても、実はとなりの男の子の文を覗き見して写しとったものであった。

かずもとはまだ文など書けない—それが私のかずもとと観であったということは正直に白状しておく。だから、『ねました』を読んだとき、私はかずもとに訊いていた。

「本当に自分で書いたが？ 人のを見てない？」

「うん」

あっけらかんとうなずかずもとであった。そのあっけらかんが、逆に私のかずもとと観を増幅し、重ねて訊いていた。

「何のこと書いたが？」

「ねえたこと」

「題は何て書いちゅう？」

「ねました」

「文は？」

「ぼくがねえたこと」

「何て書いちゅう？」

「かずもと、ねましたって書いちゅうが」

「本当のことなが？」

「ゆうべ、ねえたこと、思い出して書いたが」

彼とのこのひとこまを今思い出し綴りながら、自分の罪深さの念に駆られることを禁じ得ない。本当に彼が書いた一文だと確信をしたとき、確かに私は大喜びした。

「良かったね。えらかったね」

と、心底褒めもした。だが、だからといって、私がそれまで持ち合わせていた罪の免罪符となるわけでもなからう。

解放教育を叫びながら、少なくとも、かずもとに対しては「学ぶことの意欲」を認めていなかった

ことの自分自身の贖罪を私は、『ねました』の一文が熟成されてきたであろう彼との歩みをもう一度振り返ってみることで、それを果たしたいと思う。

◇かずもとの日常と他者の目

入学式の日、かずもとはすぐ目についた。他の子どもたちはゴザへ正座をしているのに、彼はお母さんに抱き着いたまま離れない。お母さんは困って、かずもとを連れてゴザへ座らせようとするのだけれど、かずもとは離れない。それを何回も何回も繰り返したあと、やっと離れたと思ったら、今度はゴザの上に寝転がってグルグル回る。そのままに入学式は進む。

入学式が終わって教室に行く途中、かずもとの顔を見て男の子たちが叫んだ。

「ジミーちゃんや。おまえ、ジミー大西に似いちゅう。おまえのことジミーって呼ぶき。ジミーちゃん。ジミーちゃん」

かずもとは叫び返した。

「俺、ジミーやないわあ！ かずもとよ！」

自分の名前を誇りにして、言った男の子たちをなぐりつけるかずもとだった。その後も、ジミーと言われる度に、彼は言った子たちをなぐるのだった。

かずもとは、人に「さわる」。授業中、席を立ててみんなの頭をボンボンとさわっていく。力が強いものだから、他の子どもたちからすれば、たたかれたと思うのだろうか。その度に、

「たたきなや」

と声が出る。

「たたきやせんわあ」

と、今度は本当にたたかずもとだ。かずもとの日常は「さわる」と「たたく」の境界を行き来していた。

ある日の学級会。議題は『かずもとくんが人をたたくこと』。

「かずもとくんが人をたたくのは、なんでと思う？」

私の問いかけに、子どもたちは考える。ああでもない、こうでもないの意見から、三つの結論が出た。

①本気でたたきたくてたたく。

②いっしょに遊びたくてたたく。

③かずもとくんはさわったのだけれど、力が強いから、みんなはたたかれたと思う。

私にとっては、どれも正論だった。だから、子どもたちを褒めた。

「みんな、かずもとくんをよう知っちゅう」

と。

そう褒めたところで、かずもとの「たたき」がやまるわけでもなからうが、小学校入学に当たっての連絡に、保育士が書いてきたかずもと評価、『とにかくたいへん』に代表されるような、かずもとに対する他者の目に対抗する方向に子どもたちの目が向き出したことがうれしかったからだ。

学校外の生活でも、彼への苦情は毎日のようにあった。

幼い子を泣かす。石を投げる。店のお菓子を取る。スーパーマーケットの惣菜を作る裏口に行って、作っている途中の惣菜を、汚れた手でつかんで食べる。学校からの帰りに道が分からなくなる。いいことはひとつも聞こえてこない。お母さんは、こんなことを聞かされる度に、

「いよいよ困った」

と目を宙に浮かすのだった。

虚空を見つめることしかできない母の感情を理解できない多くのおとなたちは、

「親に言うてもいかんき、学校に言う」

と、「総力」を挙げて、かずもと一家を疎外するのだった。

◇かずもとに「抛る」私の根拠

現行の「学校文化」からすれば、かずもとは、その秩序を乱す子どもにちがいない。公教育の教師である以上、その学校秩序の歯車のひとつである私が、かずもとに「抛る」根拠はどこにあるかを改めて考えてみた。

私は、かずもとに私との共通点を見るのだ。ただ一点、差別を受ける側にある—これだけなのだ。私は勉強もできた。悪いこともしなかった。だが、かずもとのように、かずもと一家のように、差別をされてきた。歴史性、社会性の問題からいえば、かずもとやその家族が受ける差別と私や私たちの受ける差別とは異質なものである。けれども、差別を受ける側のどうしようもない痛みと怒りは、人間として同質のものであることを、私は確信をしているからだ。理屈ではない。腹のそこが変になる感覚。それが私を「彼に抛らせる」第一の根拠なのだ。

第二の根拠。差別・選別の「学校文化」「秩序」を組みかえることこそが全ての差別からの解放を求める私の解放であるからだ。私はかずもとと共にそれを求めていきたいと思っている。あえて言えば、かずもとは私の同志なのだ。

◇いらだち（天秤を問う）

かずもとが「悪いこと」をすれば叱りもした。怒りもした。脅かしもしたけれど、私は決して彼を突き放しはしなかった。でも、どうしても変わらないかずもとの生活のしぶりに、いらだちもあるのだった。そのいらだちに身を任せて、かずもとに噛みついたことがある。

二年生になって、かずもとは「たたく」「蹴る」に加え、人に「噛みつく」ことを始めた。

ある日、一人の男の子が泣きながら言ってきた。

「先生、ぼくが何ちゃあしてないのに、かずもとくんが噛んだ」

見ると、右の上腕部に歯型がついて血が滲んでいる。見ただけで、たまるかと思った。これはもう許せんと思った。その怒りをおさえていきさつを聞いた。

「どうしよって噛まれたの？」

「ぼくがちょっと消しゴムを取っただけで噛みついてきた」

今思えば、この男の子のことばに、かずもとの行動が隠されていると思うのに、「ちょっと〇〇しただけ」ということばに、私は目かくしをされてしまった。

かずもとをそばに呼ぶ。男の子が言ったことをかずもとに確かめると、彼は怯えたようすを見せながら、ひとつひとつにうなずいた。彼のそのうなずきに、また腹が立ってきた。

「今度友だちに噛みついたら、絶対許さん、先生が反対に噛みつくと言うちよつたろう。噛まれたらどれっばあ痛いか、自分で味わい！」

そう言って彼の右腕を取った。そでをまくった。かずもとは叫ぶ。

「やめて！ やめて！」

私は口を開ける。口を開けたまま、涙が出た。躊躇はしたけれど、胸の中にいろんな思いが錯綜したけれど、全てを振り払って、私は噛みついた。正直、歯型もつけてやろうと思った。でも、歯に力は入らなかった。腹が立っているのに、力が入らなかった。涙だけが溢れる。口を離す。かずもとは、私が噛んだ跡をおずおずと見る。

「あっ。先生の口紅がついた」

彼の口から出たことばは、それだけだった。シーンとして、私とかずもとのやりとりを見詰めていたクラスの子どもたちは、そのことばに大笑いしてしまった。かずもとに噛まれた男の子も大笑いしていた。私は私で、初めの腹立たしさなどどこかにとんで、泣き笑いしてしまった。かずもとはかずもとで、腕についた私の口紅を自慢する。教室中を歩きながら、

「おい。森知先生の口紅ぞお」

と、うれしそうに見せびらかすのだった。

およそ、「教育」などとは言えないひとこまだったけれど、不思議なことに、それからしばらくし

て、かずもとは嘔みつくことをやめた。

整理しておかねばならない。彼が嘔みつくことをやめたことでもない。私が嘔みついたことでもない。他の子どもたちの「ちょっと〇〇しただけ」ということばと、かずもとの「嘔みつき」の比重を計る「天秤」の問題だ。

かずもとが嘔みついたりたいたいたりしたとき、子どもたちは必ず、「ちょっと〇〇しただけ」と言うのだった。先に私は、そのことばに目かくしをされたと書いた。私は、大事な「天秤」を見失っていたのだ。かずもとは、何もされないのに嘔みついたりすることは決してしなかった。彼にとって腹立たしい「何か」をされるから嘔みつくのだ。

嘔みつくことが良いとか許されなければならないとか、そんなことを言っているのではない。「ちょっと〇〇しただけ」の「ちょっと」が、どのものさしで計られた「ちょっと」であるかということを整理してみたいのだ。少なくともそれは、かずもとのものさしではなかったという事実を明確にしておきたい。あえて言えば、私はかずもとのものさしを認めていなかったということなのだ。そしてそのままに、世間一般の計量器（天秤）でかずもとの行為を計ったのだった。

私のいらだちの原因は、この「天秤」の選択の仕方にあったと思っている。

◇文字とのたたかい

かずもとは、入学当初から文字を自分のものにしていなかった。一年の二学期が終わりに近づこうとしても、機械的に写しとることはできても、ひとつひとつの文字が何の音を表わすものなのかもわからなかった。

一年の一学期、ひととおり教科書を使ってのひらがな学習がすんだあと、かずもとに文字を尋ねてみるのだが、彼はそのひとつひとつに「わからん」と首を振る。教科書による文字指導などともと信頼していない私であったから、かずもとのこの様子にも驚きはなかった。そこで、私とかずもとの一対一の文字学習が始まる。

まず、粘土による文字作り。

「『あ』を作ろう、『い』を作ろう」

そういう私の働きかけに、彼はうれしそうに粘土の紐を作る。見本の文字を見ながら丁寧に作っていく。

「これが『あ』よ」

「わかった」

大きくうなずかずもと。

二、三日して、

「この字は何の字」

と問うと、

「わからん」

と首を振る。その繰り返しが何日続いたことだったろう。思うように成果が上がらないので、別の方法に取りかかる。

放課後の教室で、また二人きりの文字学習。飴を彼に見せる。その飴を彼の口に入れてあげる。そして文字を見せる。

「これが飴の『あ』」

「うん。わかった。おいしい」

少し間をおいて、『あ』を問う。

「わからん」

と、また首を振る。いらだって、

「吐き出せ！」

と言ったこともある。

それぞれの文字についても、彼の身のまわりの物と文字とを結びつけながら学習してきた。でも、少しずつ獲得はしてきたけれども、三学期の終わりに五十音の三分の一がやっとというところであったろうか。だから文字を書くことはもちろんのこと、読むことさえもまともにできないかずもとであった。私に焦りがなかったわけではない。だが、彼の一步に自分の歩幅を合わせることで、その焦りをおさえてきた。

三学期になって、休み時間に子どもたちの本読みカードの点検をしていると、私の手元を覗きこんでいたかずもとが何かを読んでいる。手を止めて聞くと、その本読みカードに書かれてあるクラスの子どもたちの名前をひとりひとり正確に読んでいるのだ。一字の間違ひもない。びっくりした。

「字、分かるが？」

「うん。分かる」

彼は、あっさりとうなずいた。

「友だちの名前は、みんな読める」

ニコニコと笑顔で彼は言った。その笑顔に、私は自分の勘違ひに気づかされた。

文字の獲得ということは、基本的には自分の生活と密着して成し遂げられるものが本物である以上、これまでの私とかずもととの学習は、その生活から遊離していたものではなかったか。つまり、私が提示した文字のための教材は、彼にとっては、無機物でしかなかったのだ。

「友だちの名前は、みんな読める」

この子にとっての文字とは、まさに息づかいのある人間の関係性を求めるものであるのだ。私は、かずもとに人間にとっての文字の本質を教えられたように思ったのだった。そういえば授業中に文字を書くとき、彼はよくとなりの子どもの文字を覗き見書きしていたのだった。その多くは名前を写し取っていたのだった。

以後、友だちの名前、担任である私の名前、大好きなお母さん、それぞれの名前を教材にして文字とたたかっていくことになる。そういった二年間の歩みが生み出した最後の生活つづり方が『ねました』であった。

お母さんも喜んだ。

「やっと自分で書けだした」

と喜んだ。熟成された一文をかみしめていた。

既成の「学校文化」にせかされつづけた私でもあった。今もその感がないわけではない。だが、かずもとはそんな文化的強迫にも負けず、生活と文字とことばを熟成させてきた。

三年生になったかずもとは、教室を飛び出したりもするそうだ。友だちに噛みつくことも、また始めたのだそうだ。そして再び、「この子はたいへん」と始めたのだった。

それを聞く度に、彼をそうしたものに怒りを抑えながら歯ざしりをした自分を思い出す。

あの日からもうずいぶん長い時間が経ってしまった。かずもとに教えられたことをだいにしながら、私は今でも、「待つ」と「せかされる」の間で小さくたたかっている。

